

今俗面などに肉色といふは人色といふべし、教訓抄五の卷<sup>五</sup>丁退宿徳の條に、人色ノ面<sup>眉</sup>白とあり、又<sup>十九</sup>貴徳の條に面二様<sup>人</sup>口と見ゆ、

〔伊呂波字類抄<sup>知</sup>人體〕血<sup>チ</sup>

〔身體和名集<sup>乃</sup>〕ノリ 人血

〔延喜式<sup>五</sup>齋宮〕凡忌詞内七言<sup>略</sup>○中血稱<sup>阿</sup>世<sup>世</sup>、

〔日本書紀<sup>神代</sup>〕伊弉諾尊<sup>略</sup>○中拔所帶十握劔斬軻遇突智爲三段、此各化成神也、復劔刃垂血、是爲天

安河邊所在五百箇磐石也、卽是經津主神之祖矣、

〔神皇正統記<sup>神代</sup>〕第三代天津彦々火瓊々杵尊、天孫とも皇孫とも申、皇祖天照太神、高皇產靈尊、い

つきめぐみまし〜て、葦原の中洲の主となしてあまくだし給はんとす、爰に其國邪神あれてたやすく下給ふ事かたかりければ、天稚彦と云神をくだしてみせ給ひしに、大汝の神の女下照姫にとつぎて返り事申さず、三とせになりぬ、依て名なし雉をつかはしてみせられしを、天稚彦射殺しつ、其矢天上にのぼりて太神の御まへにあり、血にぬれたりければ、怪め給ひて投下されしに、天稚彦新嘗してふせりける胸にあたりて死ぬ、世に返し矢を忌は此故なり、

〔日本後紀<sup>十三</sup>桓武〕大同元年三月辛巳、是日有血灑東宮寢殿上、

〔陰徳太平記<sup>九</sup>〕興久被斬化者事

變化ノ者今夜切タリ、跡ヲ認テ見ヨヤト下知セラレケレ共、ノリ。ナドヲモ不引ケレバ、何處ヲサシテ尋ヌベキ様モナシ、興久正シク縁ノ下へ入タル様ニ覺エタリト宣間、卽縁ノ下へ入テ見ルニ大ナル穴アリ、頓テ是ヲ掘テ見レバ、二丈餘リホリ入テ、底ニ高サ九尺許ナル五輪一基、三尺許ノ五輪二ツゾ有ケル、小サキ五輪ノ頭ニハ血付タリ、コレ興久ノ打レケル時、拳ノ皮剝タルナリ、又大キナル五輪ニハ、頭ニ大刀ノ癩二ツアリケリ、